

# 現代日本語の部分量を表す副詞の程度修飾用法について

小西 正人

**抄録：**現代日本語において部分量を表す一群の副詞「少し」「ほとんど」「全部」等のふるまいは一様でない。本論文ではこれらの副詞の程度修飾用法における分布の相違について、おもにそれぞれの副詞と共起可能な述語表現の種類と意味について観察・分析を行った。その結果、部分量を表す一群の副詞について、それぞれのふるまいの違いを示しながら、部分量を表す副詞の中で程度修飾が可能であるものと不可能であるものがあること、「少し」は基準値からの程度差を表すため、形容詞を中心とする状態性述語と共起しやすいのに対し「半分」は下限値・上限値の両方が画定される「スケール全体」が必要であること、また佐野（1999）でも指摘されているように「ほとんど」はスケール全体の画定がなくても特定の点に限りなく近い状態であることを表すことができ、それは英語および韓国語の「到達事象の進行相」と同様の方略であることを示すことができた。

**キーワード：**部分量を表す副詞，程度修飾用法，状態性／動作性述語との共起

## 1. はじめに

現代日本語の副詞のなかで、部分量を表す（あるいは表すことのできる）一群の副詞（いわゆる「名詞の副詞的用法」などもここでは含めて考察の対象とする）がある。これらの副詞は、たとえば消費動詞などと共起して対象の消費量を表すことができる。

(1) 魚を {少し／半分／たくさん／ほとんど／全部} 食べた。

しかしこれらの副詞のふるまいは一様ではなく、たとえば以下の例においては「少し」は可能であるが「半分」「ほとんど」はあらわれないことができない。

(2) 今日は {少し／\*半分／\*たくさん／\*ほとんど／\*全部} 暑いね。

これは例 (1) が対象の部分量を表しているのに対し、例 (2) では「暑さ」の程度を当該の副詞が修飾している（あるいは修飾できない）という意味の違いによるものであると考えることができる。

本稿では部分量を表す副詞「少し」「半分」「ほとんど」におけるこれらのふるまいの違いについて、それぞれの副詞の表す意味をもとに分析を行う。

## 2. 共起からみるそれぞれの副詞の性質

### 2.1 形容詞述語を主とする状態性述語との共起

ここでは形容詞述語を主とする状態性述語との共起についてみることにする。

前節の例 (1) のとおり、多くの形容詞は「少し」と共起して主節を形成することができるが、「半

分)「ほとんど」「全部」と共起して当該の形容詞の表す意味の程度を修飾することは難しい。(以下の用例において、例文左肩の「\*」は容認不可であること、「?」は容認度に疑問があること、また「#」は別の意味での解釈が可能であることを示す。たとえば(3b)「少し赤い」では「赤い程度が少し」という意味を表す例文として例示されているのに対し、「全部赤い」というのは「赤い程度が『全部』である、真っ赤である」という意味ではなく「すべての対象が赤い」という意味を表すと解釈されるため、「#」が付されている。)

- (3) a {少し／\*半分／\*たくさん／\*ほとんど／\*全部} 嬉しい。  
 b {少し／#半分／\*たくさん／?#ほとんど／#全部} 赤い。

また状態や属性を表す動詞テイル形とも「少し」は相性がよい。これは基体動詞の意味により共起可能性が異なる「半分」などとは対照的である。

- (4) a この問題は {少し／\*半分／\*たくさん／\*ほとんど／\*全部} 込み入っている。  
 b 道端の雪が {少し／半分／#たくさん／ほとんど／#全部} とけている。  
 c 実際のところ、{少し／?半分／\*たくさん／?ほとんど／#全部} 困っている。

同様に「数や分量」を表す「たくさん」と比較してみると、この違いがはっきりする。以下、動作性動詞述語の場合もあわせて考えてみる。

- (5) a {少し／たくさん／100g} 食べた／作った／残した。  
 b {少し／たくさん／100人} 来た／会った／増えた。  
 c {少し／\*たくさん／100g／100人} 足りない。  
 d あと {少し／\*たくさん／100g／100人} ほしい。  
 e もう {少し／\*たくさん／100g／100人} 加えましょう。

この場合、「少し」は数量表現「100g」「100人」と同じようなふるまいを示しているのに対し、「たくさん」はそうではないことがわかる。

渡辺(1990)では「すこし、ちょっと、やや」などの「程度が小であることを表わす言葉」は「XはYより——Aだ」という比較構文で用いることができることが指摘されている(渡辺1990:7)が、数値0から始まる数値的数量表現と「少し」との類似は、「少し」が程度意味の修飾を行う際にも引き継がれている。

例(2)において「今日は少し暑い」といった場合、単に「今日は暑い」といった場合と比べてたとえば以下のような解釈をもつことができる。

- (6) a 今日は(「暑い」というほどではないが)少し暑い。  
 b 今日は(夏なので暑いのはわかるがそれでも)少し暑い。  
 c 今日は(思っていたより)少し暑い。

(6) の例文で言及されている「暑さ」を比べた場合、(6a) では「少し暑い」において表されている暑さは「暑い」以下であるのに対し、(6b, c) の場合は「少し暑い」は「暑い」を超えているように解釈される。

これは「少し」が「Xは——Aだ」という計量構文で用いることのできる「計量系」の副詞であると同時に「基準からの差」を修飾する「比較系」の程度副詞であることから説明できる。すなわち(6a) では「暑くない」温度を基準とし、そこから少し「暑い」方向に位置する値を示しているのに対し、(6b) では「夏の通常の温度」あるいは「当該時期の平年の温度」を基準とし、そこからの「少し」の「暑い」方向に位置する値（同様に(6c) では「思っていた温度」を基準とし、そこからの差分）を示しているためである。

また佐野(1999)では「丸い」「赤い」などは「非常に、とても」などと共起可能であることから「[程度性]を持つ状態性述語」に分類されているが、「少し」との共起はそれほど自然でない場合もあり、その場合は「少し丸めだ」「少し赤めだ」のように接尾辞「-め」が用いられることもある。

このようなふるまいをみせる「少し」に対し、純粋な程度副詞である「やや」などは、程度差を表す文脈では「少し」と同様のふるまいを示すが、(5a, 5b, 5d, 5e) などの数量表現が必要とされる文脈では現れることが非常に難しいか、不可能である。また「多少」の場合、「やや」に比べ共起可能となる場合が多い(5a, 5b, 5c, 5d)が、「もう」とは共起しない(例(5e)。ただし同様の意味を表す「さらに」とは共起可能であるため、たとえば「ほとんど」が「もう」「さらに」と意味的に共起できないこととは別に考える必要がある)。

「半分」の程度修飾用法について論じた小西(2017)でも示したとおり、「半分」の程度修飾用法は「上限・下限をもつ当該スケール全体」が分明であることが「その半分」を指示する前提となる。そのため、基本的には上限値をもたない多くの形容詞、および一部の動詞テイル形は程度修飾用法の「半分」（意味的には「半ば」に近い）と共起することができない。そして同様の理由で「ほとんど」とも共起することはできない。

(7) a 半分 {赤い / 暑い / 込み入っている}.

b 半分嬉しく、とはいえ半分困ってる。

そして「全部」の場合、部分量を表す用法では「半分」と同じように「上限・下限をもつ当該スケール全体」が分明であることが前提となるが、「少し」や「半分」がもつ程度修飾用法を「全部」はもたないようである。程度修飾用法として同様の意味を表す場合、「完全に」「完璧に」などの別の語が用いられる。

(8) a 道端の雪が {全部 / 完全に / 完璧に} とけている。

b 入り口のドアは {全部 / 完全に / 完璧に} 閉まっている。

c 昨日は {全部 / 完全に / 完璧に} 打ちのめされた。

## 2.2 動詞述語を中心とする動作性述語との共起

小西 (2017) では、程度修飾を表す「半分」について、a) スケール程度修飾, b) 量的程度修飾, c) 該当程度修飾という3つの用法があることを指摘した。それぞれの例を挙げる。

- (9) a ここは半分オープンな空間になっています。 (スケール程度修飾)  
b 彼は半分冗談で、けれども半分は本気でそう言った。 (量的程度修飾)  
c 半分駆け足で校舎に戻った。 (該当程度修飾)

スケール程度修飾 (9a) は「オープンさ」に関するスケールがあり、対象のもつ「オープンさ」に関する値がちょうど真ん中程度 (「半分」) であることを表しているのに対し、量的程度修飾 (9b) では当該の発言についての「彼」の態度・気持ちのうち「半分」が冗談、けれども残りの「半分」は本気であるというように「彼の態度・気持ち」全体に対する「量」が「半分であること (ここでは「発言内容」の量ではないことに注意)、また該当程度修飾 (9c) は当該の事象が「駆け足」という語で叙述できる程度 (該当程度) が「半分」であること、すなわち「完全に駆け足」ではないが「駆けていない」わけではないこと、を表している。

そして小西 (2017) では形容動詞・形容詞・名詞述語ではこれら3つの用法が可能である場合が多いのに対し、動詞述語では (それぞれの動詞が表す意味の違いによって差はあるが) (9b, c) にあたる「量的程度用法」「該当程度用法」での例が非常に少ない (あるいはまったくない) ことを指摘した。本論文では「半分」以外の部分量を表す副詞について、動作性述語との共起という点からみていきたい。

まず「スケール程度修飾」の例をみていこう。2.1でもみたとおり、部分量を表す副詞について、それらが程度量を表すことができるかどうかという点で違いがあるようである。ここでは状態変化動詞の例をとりあげる。

- (10) a 加熱したら {少し／半分／\*たくさん／ほとんど／#全部} 固まった。  
b その話は {少し／半分／\*たくさん／ほとんど／#全部} 理解した。

小西 (2017) で「状態変化動詞」のうち「段階性をもつ動詞」とした動詞類との共起については、共起が可能な「少し／半分／ほとんど」類と、不可能な (あるいは物理的部分の意味しか表すことができない) 「たくさん／全部」類とに分かれる。これは後者が程度に関する修飾が不可能であることを示している。

また段階性をもつ動詞のうち、「汚れる」などの程度スケールの下限値のみをもつ動詞 (すなわち少し汚れただけでも「汚れた」ということが可能) については、2.1での考察同様、「少し」は共起できるが「半分」「ほとんど」によるスケール程度修飾は不可能で、文脈により上限値が設定できる場合、あるいは「量的程度修飾」「該当程度修飾」として解釈可能である場合のみ共起が可能となる。

- (11) a {少し／#半分／\*たくさん／#ほとんど／#全部} 汚れた。  
b そのうちに心が半分汚れてしまった。

そして同じ段階性をもつ動詞のうち、「凍る」などの程度スケールの上限值に至る変化を表す状態変化動詞については、基本的にこれらの副詞を用いて程度を修飾することはできない（ただしテイル形や連体タ形で状態性の述語となっている場合は除く）。

(12) 冷蔵庫に入れておいた野菜が {#少し/#半分/#たくさん/#ほとんど/#全部} 腐った。

### 2.3 「極限点」をもつ、あるいは「一点的」である状態性述語との共起

佐野 (1999) は「[程度性]を持つと同時に「極限点」を想定しうる状態性述語」(「正確だ」「健康だ」「満員だ」, および形容詞否定形など), および「[一点的]である状態性述語」(「等しい」「同時だ」「六月だ」など) には「ほとんど」が共起できることを指摘した。その理由として、これらの状態性述語は「極限点」や「ゼロの点」が存在し、「ほとんど」と共起した場合はその点に限りなく近い状態を想定することができるためであるとしている。

(13) a ほとんど正確だ。

b 韓国料理のわりにほとんど辛い。

(いずれも佐野 1999 : 41)

これらの述語については「上限・下限を含めたスケールの全体」を設定する必要はなく、当該の「一点」に近い状態を表すことができればよい。スケールの全体を必要とする「半分」や、スケール値の小さいことを表す「少し」などは共起することができない場合が多い。

この「ほとんど」の用法、とりわけ「一点的」である状態性述語に「ほとんど」が共起することによって「限りなく近い状態」という程度化解釈を引き出す方略は、Rothstein (2004: Ch.2) が詳細な分析を行った「英語の到達事象 (achievements) が進行相 (progressive) をとったとき (progressive achievements) に意味的なシフトが起こり、到達事象が成立する「その直前」の局面を表すことができるようになる」という方略（韓国語での同様の方略については金 (2011: 100-127) を参照）と同じものであると考えることができる。したがっていずれの場合も「その一点」に近い値しか指すことができず、十全のスケールを形成することはない。

またこれらの述語についても「全部」は共起できないのに対し、程度を表す「完全に」「完璧に」などは共起することができる。

## 3. まとめと課題

本論文では、現代日本語の副詞のなかで、部分量を表す一群の副詞について、それぞれのふるまいの違いを示しながら、その相違についての分析を行った。その結果、部分量を表す副詞の中で程度修飾が可能であるもの（「少し, 半分, ほとんど」）と不可能であるもの（「たくさん, 全部」）があること、「少し」は基準値からの程度差を表すため、現代日本語の形容詞を中心とする状態性述語と共起しやすい（「基準値」を「0 (A でない)」「通常値」「予想値」などの設定可能) のに対し「半分」は下限値・上限値の両方が画定される「スケール全体」が必要であること、また佐野 (1999) でも指摘されているように「ほとんど」はスケール全体の画定がなくても特定の点に限りなく近い状態であることを表すことができ、それは英語および韓国語の「到達事象の進行相」と同様の方略であることを示すこ

とができた。

ただし他の副詞との体系的な比較や、各副詞に関する包括的なふるまいの提示・分析を行うことができなかった。次回以降の課題としたい。

## 文献

金京愛, 2011, 「現代韓国語の時間関係形式——〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の機能を中心に——」

京都大学大学院文学研究科博士論文。

小西正人, 2017, 「量の副詞「半分」の「程度的用法」について」『北海道文教大学論集』18: 1-17.

Rothstein, Susan Deborah, 2004, Structuring events: a study in the semantics of lexical aspect, Malden MA: Blackwell Publishing.

佐野由紀子, 1999, 「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『現代日本語研究』6: 32-50.

渡辺実, 1990, 「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23: 1-16.

# **On the Usage for Degree Modification of Adverbs for Partial Quantities in Modern Japanese**

KONISHI Masato

**Abstract:** In modern Japanese, the behavior of the adverbs "sukoshi (a little)," "hotondo (almost)," "zenbu (all)," and so on, which express partial quantities, is not uniform. In this paper, we observed and analyzed the differences in the distribution of these adverbs in terms of their usage for degree modification, mainly in terms of the types of predicative expressions that can co-occur with each adverb and their meanings. As a result, this paper presents an analysis of the differences among adverbs expressing partial quantities in modern Japanese, showing the differences in their respective behaviors. The results show that some adverbs expressing partial quantities can modify degrees while others cannot, that "sukoshi (a little)" expresses a difference in degree from a reference value and thus can easily co-occur with state predicates, mainly adjectives, while "hanbun (half)" requires a "whole scale" in which both the lower and upper limits are defined, and that, as pointed out by Sano (1999), "hotondo (almost)" can express the state of being as close as possible to a specific point without the definition of the entire scale, which is a similar strategy to the "progressive achievements" in English and Korean.

**Keywords:** adverbs for partial quantities, degree modification